

\*\*\*\*\*

## Long Distant Call

### ―深層の儀良、表層の正太郎―

1

「吉備津の釜」は、なぜあの奇妙な妬婦断罪論からはじまるのだろうか？

妬婦とぶの養ひがたきも。老ての後其功を知ると。咨あこれ何人の語ことばぞや。

語り手はまず、妬婦にもそれなりにいいところはある、という先人の言をあたamarcaから否定するところから議論をはじめめる。まるで妬婦に個人的なうらみでも抱いているかのように……。しかし、このあとに続くのは、意外に一般的・常識的な議論である。観念的といってもいい。

害わざはひひの甚しからぬも商工わたらひを妨げ物を破りて。垣せしりの隣の口をふせぎがたく。害わざはひひの大なるにおよびては。家を失ひ国をほろぼして。天が下に笑を伝ふ。

要するに、妬婦というものは「商工を妨げ」「家を失ひ国をほろぼ」から、「害」があるというのだが、ここはなるほどまあそんなこともあるかもしれない、というレベルの議論にすぎないといえる。にもかかわらず、突然はげしい口調になって、

いにしへより此毒いづくばくにあたる人幾許いくばくといふ事をしらず。死なて蟒みづらとなり。或は霹靂はたがみを震ふるふて怨うらみを報たぐひふ類たぐひは。其肉を醢ししひにするとも飽あべからず。

と言いはじめめるのだから、わけがわからなくなる。この一節が中国の随筆『五雜俎』を下敷きしているということ割り引いたとしても、「其肉を醢ししひにするとも飽あべからず」などという激越な言葉は完全に常軌を逸しているというしかない。なによりも問題なのは、ここで「毒」といい「害わざはひ」というところのものが、「嫉妬」（後述のごとくここでは「女の慳かたましき性さが」によるものとされている）の結果もたらされたものであるとして、なぜそういう事態に至ったかについては全く顧慮されていない点である。なぜ「死なて蟒みづらとなり。或は霹靂を震ふるふて怨うらみを報たぐひふ」ような激しい嫉妬が生まれるかを考えてみれば「醢ししひにするとも飽あべからず」と断罪するだけですまないことは明白なはずであるが、そうした問題を全く顧慮しないこの一節は、男の側の都合だけを考えた一方的なものにすぎないと言わざるをえない。

語り手も、さすがにそこには気づいたらしく、この直後、「さるためしは希なり」と議論の方向を転換し、以後、男の側の問題を語りはじめめる。

夫のおのれをよく脩おさめて教おしへなば。此患うれひおのづから避さべきものを。只かりそめなる徒あだ

ことに。女の慳しき性を募らしめて。其身の憂をもとむるにぞありける。夫がしつかりしていればその「害」は防げるのに、それができないために「憂をもとむる」ことになるのだ、と説明するわけであるが、しかし、嫉妬の原因については、わずかに「かりそめなる徒こと」と言い捨てるだけですませているという点は、よく覚えておくことにしよう。結局、

禽を制するは氣にあり。婦を制するは其夫の雄々しきにありといふは。現にさることぞかし。

という教訓でこの冒頭文は締めくくられているのであるが、しかし、この程度の教訓で、男と女の問題が片付くと本当に思っているのだろうか？

ためしに、この冒頭文で述べられていることを「吉備津の釜」の作品世界のなかに投げ込んでみるだけでいい。正太郎と袖の逃避行は「かりそめなる徒こと」にすぎないのだろうか？ 磯良が死霊として正太郎にしたことは「醜にするとも飽べから」ざるものとして断罪すればすんでしまうことなのだろうか？

このように問いかけてみればすぐ明らかのように、この作品の内容は、この冒頭文の内容をみごとに裏切っている。そこに含まれる教訓が、この物語において何の意味も持ちえないことを、作品自体が証明しているのである。

そうであれば、この部分は不要なものとして省いてしまつていいはずである。が、作者はそうはしなかった。それはなぜか？

「吉備津の釜」の作品論はここから出発すべきであると私は考える。この問いに答えられないかぎり、私の「吉備津の釜」論は終らないのである。

## 2

一人息子正太郎の放蕩を嘆いた両親が、

あはれ良人の女子のよきを娶りてあはせなば。渠が身もおのづから脩まりなん

と考え、嫁探しが行なわれた結果、「吉備津の神主香央造酒が女子」が候補に選ばれる。「吉備津の釜」の物語はここからはじまる。結婚が家の存続を前提としてすべて親の意向に基づいて行なわれる時代であったことを考えてみれば、このプロセスは当然といふべきでなんら異とするにはあたらない。むしろ、井沢家が香央の家の血筋に興味を示し、香央側は（明示的に書かれてはいないものの）井沢家の経済力を尊んで両者の合意が成るといふあたりの両家のあり方は、簡潔ながらそれぞれの家の事情を的確に押さえていて秀逸と評してよい。

問題は、この婚約が成ったあとに香央造酒が釜祓いを行なったことにある。

そもく当社に祈誓する人は。数の穢物を供へて御湯を奉り。吉祥凶祥を占ふ。巫子祝詞をはり。湯の沸上るにおよびて。吉祥には釜の鳴音牛の吼るが如し。凶きは釜に音なし。是を吉備津の御釜祓といふ。

釜祓いの神事の由来についての説明であるが、もし、この神事が本当に「吉祥凶祥を占ふ」ものであったならば、媒人が話をもってきた段階で行なわれるべきであろう。その段階であれば、占いの結果に基づいて断わることは簡単にできたはずだからである。しかし、それは行なわれず、婚儀の整った段階で神事が行なわれたことに関して、従来からも順序が狂っているという批判が出されていた（重友一九六三など）。当然予想される見解だが、

しかし、この神事は本当に「吉祥凶祥を占ふ」役割を持っていたのだろうか。むしろ、この釜祓いは儀式としての意味合いがほとんどで、「吉祥凶祥を占ふ」という意味はほとんどなかったと見るべきなのではないだろうか。

きちんとした文献を提示していうことのできないのが残念だが、この釜祓いは、ほとんどの場合「牛の吼るが如」き音がするものであって、音のしないことはめつたにない、というような説明を吉備津神社を訪れたおりに私はたしかに聞いたおぼえがある。テレビでの実演も見たことがあるが、やはりそのようなように解説されており、実際になんの苦もなく釜の鳴る音を出していた。身近な例にたとえていえば、神社のおみくじの大部分が「吉」（大吉）末吉までであるが）であり、「凶」はほんのわずかしかない（神主に知り合いがいればその割合についての情報を得ることができようが、残念ながらその便宜を得ることができない。企業秘密に属することなのかもしれないが、吉凶の割合について御教示いただければ幸いである）、というふうなことを考えてみてもいいはずで、この釜祓いは吉と凶が任意の確率で出る（＝吉が出るか凶が出るかは神のみぞ知る）という純粋な占いではなかったと考えるべきなのではあるまいか。

だからこそ、香央造酒が釜祓いをする箇所本文には「猶幸を神に祈るとて」とは書かれていても、「神に吉祥凶祥を占ふ」とは書かれないのであろう。香央造酒は、いつも試みているときと同じ結果（おそらく95%以上の確率で釜が鳴ったはずである）の出てくることを予想し、この結婚が神に祝福されるものであることを確信して釜祓いを行なったはずなのである。しかし、結果はそうではなかった。

さらに香央が家の事は。神の祈うけさせ給はぬにや。只秋の虫の叢くわむらにすだくばかりの声もなし。

この結果に当惑し、妻に相談したこと、あるいは、妻が「祝部等が身の清からぬにぞあらめ」としてその結果を問題にしなかったことについては、

○吉備津神社の神主が、神社の神の託宣を用いなかった。（長島弘明一九九八）

○禁止の神託への抗命は、すでに神託や易占が信じられなくなっていた、近世的な合理思想の状況を反映している。（高田衛・稲田篤信一九九七）

というふうに説かれているが、そこまで言う必要があるかどうか。たしかに、結果としては、そう言われてもやむをえないことになりはしたのだが、物語の段階に即してみれば、釜祓いを彼等が本当の意味での占いとはみなしていなかった以上、無視してもそれほど責められるべきこととはいえないはずである（先の例でいえば、おみくじで「凶」が出たからといって、すでにまとまっている結婚話をすぐにこわそうとするか、というふうな考えをみればよい）。

むしろ、この神託が神官自身も予想しなかったきわめて異例のものであったことをなによりも先に確認すべきであり、それゆえにこそ、生身の人間である神官は（あるいは、神託を尊重すべき立場にある神官でさえ、といってもいい）その神託を受け入れること注1ができなかつた、というふうな解すべきだと思われる。

神託の凶祥は、この作品の主調低音となつて、磯良と正太郎の結婚生活を規定している。とはいっても、それが二人の結婚生活破綻の原因なのではない。

礒良がいかに「夙つとに起おき。おそく臥ふて。常に舅姑おやくかたへの傍かたへを去さず。夫が性さがをはかりて。心を尽つくし」て、高田・稲田一九九七における評釈がまことに適切に指摘するごとく『女大学』の権化のように「仕へ」ても、あるいは、井沢夫婦に「孝節」ぶりを感心されても、また、夫が「其志めいに愛めでてむつまじく」してくれたとしても、結局うまくゆかなかつたのは、正太郎の「おのがまゝのたはけたる性さが」に他ならない。どうにもならない彼の本性として措定されたこの性格が、以後のすべての不幸を導くことになる。

そして、こうした正太郎の「性さが」によって夫婦生活の破綻がもたらされた、という説明の存在することが、この作品の近世小説としての質を決定している。これ以後、「おのがまゝのたる性」の発露であるところの妻礒良への不実ぶりが丁寧ていねいに記され、それは、妻礒良の努力によってもどうにもしようのないものであることが印象づけられる。それをただ見守るしかない井沢・香央の人々を人々も含めて、このあたりの人間模様の描き方にはほとんど間然するところがない。こうして、以下の物語は、正太郎の「性」の引き起こす悲劇という見取り図のもとに展開することになり、その結果、釜祓かまはらいの神託は、それらの背後に奥深く秘められていくことになるのである。

鞆たづの津の遊女袖との出奔、その折の礒良に対する裏切りについては特に言うべきことはないが、袖と別宅に住みはじめた正太郎に対して、

礒良これを怨うらみて。或は舅姑おやくの忿いかりに托よせて諫いさなめ。或ひは徒あだなる心をうらみかこてども。とあること、及び礒良からだまし取った金を持つて出奔した正太郎に対して、

かくまでたばかられしかば。今はひたすらにうらみ嘆なげきて。遂ついにに重おもき病びょうに臥ふにけり。と書かれていることだけはぜひ書き留めておくことにしよう。冒頭文に則したがっていえば、礒良が「妬婦」と化していく場面だからである。

と同時に、その原因にあたる正太郎の一連の不実な所行がまことに丁寧に叙述されていることも、改めて引用することはしないが、忘れるべきではあるまい。これまた、冒頭文の流儀でいえば、正太郎の「かりそめなる徒こと」の結果ということになるわけだが、妻を裏切り親を悲しませる正太郎の行為はどう弁護してみても「かりそめなる徒こと」といつてすませられるレベルのものではない。

井沢香央の人々彼を悪にくみ此こを哀あはれみて。専もほ医いの験しるしをもとむれども。粥かゆさへ日々ひびにすたりて。よろづにたのみなくぞ見えにけり。

というふうには、正太郎が両家の人々から指弾され、礒良が同情されているという事態がなによりも雄弁ゆうべんにそのあたりの事情を物語っている。

とすれば、くどいことを承知のうえで言うのだが、正太郎は、ここでは、もはや、「夫のおのれをよく脩ととめて教へなば。此患おのづから避よべき」とか、「禽あひを制するは氣きにあり。婦めを制するは其夫の雄おとこしきにあり」というような一般的な夫の倫理規範で解決しうる範圍を逸脱してしまったところにいると言わなければならない。この段階で、物語はすでに、冒頭文がカバーしうる範圍を超えてしまっているのである。

ここで、かりに、冒頭文的な立場を男性原理と呼んでおけば、物語が佳境に入ったこの段階でその原理は崩壊したわけである。しかし、語り手はその原理が依然として有効であるようにふるまう。以後の叙述が、逃亡する正太郎に即してすすめられ、礒良の側から書かれることはない、というのがその端的な証明である。しかし、丁寧に読んでいけば、物語の深層に、礒良の立場に寄り添った女性原理による物語が伏在していることが見て取れるよう。そして、物語は、両者の亀裂をかかえたまま、クライマックスへと突き進んでい

くのである。

袖の従兄彦六と出会い、その隣の「破屋」で住いをはじめた正太郎と袖にたちまちのうちに磯良の「窮鬼」の手が忍び寄り寄ってくる。

袖。風のこゝちといひしが。何となく脳み出で。鬼化のやうに狂はしげなれば。こゝに來りて幾日もあらず。此禍に係る悲しきに。みづからも食さへわすれて抱き扶くれども。只音をのみ泣て。胸窮り堪がたげに。さむれば常にかはるともなし。窮鬼といふものにや。古郷に捨し人のもしやと独むね苦し。

ここに『源氏物語』『葵』の六条御息所の生霊の登場する場面の語彙が頻出することをあらためて指摘する必要はないであろうが、それは、「妬婦」と化した磯良が、『源氏物語』における六条御息所のありようを投影しながら登場してきているということの意味する。すなわち、光源氏と御息所の不幸な関係が、彼等二人にそのままあてはまる、ということである。これを磯良の側―さきの用語でいえば、この物語における女性原理の側―からいえば、結婚する前から、「佳婿の麗なるをほの聞て。我児も日をかぞへて待わぶる」と言われ、嫁いでも「夫が性をはかりて。心を尽して仕へ」、父母によつて押し込められた夫を「悲しがりて。朝夕の奴も殊に実やかに」つとめ、夫のいつわりの無心に対して「いと喜しく。此事安くおぼし給へとて。私におのが衣服調度を金に買。猶香央の母が許へも偽りて金を乞。正太郎に与へ」という彼女の一連の行為が、夫に対する深い愛情―という言い方は必ずしも適切でないかもしれない、恋情あるいは愛執というような用語を使つてもいいだろう―以外のなものでもないということであると同時に、それは、夫正太郎には全く理解されない一方的なものでもなかったということでもある。袖とともに駆け落ちする正太郎の姿はそのことをなによりも雄弁に物語るものであるが、そういう磯良の心情が、光源氏に絶望的な愛情をそそぎつつも、かなえられないまま生霊となることがなかつた六条御息所の姿に重ね合わされているということがなによりも重要なことなのである。しかし、ここでは、叙述の視点―さきの言い方でいえば、物語の表層を占める男性原理である―が正太郎に固定されているため、彼にとつてその磯良の愛情（ないし恋情ないし愛執）は、袖の死と、それが「古郷に捨し人の」「窮鬼」のしわざによるかもしれないという恐れとしての意味しか持ちえない。両者の懸隔は想像以上にはなほだしいのである。

葵の上に取り憑いた生霊の正体が御息所であることを確信したとき、御息所と光源氏との関係は実質的に終わり、傷心の御息所は娘の斎宮とともに伊勢に下るのであるが、磯良と正太郎の関係は袖の死で終わることはない。

ここに至つてはじめて、「吉備津の釜」独自の「妬婦」像が提示されることになる。冒頭文で「女の慳しき性」によるとされていた「嫉妬」というものの本質が開示されるのである。

袖の死後、正太郎は魅入られるようにして磯良の死霊に招き寄せられることになるが、この荒野の三昧堂で展開される怪異の場面については、いろいろな意味でよくわからない点がある。そのわからなさは、末尾の死霊の詐術とされる場面とも関連しているはずなの

で、すこし丁寧にみておきたいと思う。

袖の死からあとは、

1、袖の死

2、袖の葬送

3、墓参り

4、墓参りをする若い女との出会い（以下略）

という順に記されているが、このうち、4以後に登場する若い女はあきらかに礒良のしわざによるものであるうから、正太郎はこのあたりから礒良のワナのなかに入り込んでみるとみてよいだろう。しかし、1における、袖の死に対して正太郎が、

天を仰ぎ。地を敲きて哭悲しみ。ともにもと物狂はしきを  
と嘆き、3でも、

正太郎今は俯して黄泉をしたへども招魂の法をももとむる方なく。仰ぎて古郷をおもへはかへりて地下よりも遠きこゝちせられ。前に渡りなく。後に途をうしなひ。昼はしみに打臥て。夕くごとには のもとに詣て見れば。

というふうには、嘆く様子の描写は、いささか大袈裟にすぎるような感じを受けなくもない。その理由の大部分は、意識的に漢文的な対句表現を多用している点に求められるが、そういう表現上の特色からみても、このあたりですでに正太郎は礒良の術中に陥っているとみなすことは可能ではないだろうか。かりに、そのように解してみると、死霊となった礒良が正太郎に対して発した言葉の意味はよりいっそうはつきりしてくるのではないかと思われる。

めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせまいらせん

という礒良の言葉は、むろん正太郎に向けられたものだが、彼自身は恐怖が先行しているため、その言葉の意味をほとんどまともに受け取ろうとはしない。

我を指たる手の青くほそりたる恐しさに。あなやと叫んでたをれ死す。

ここの「我を」という人称代名詞の使い方は、重友一九五七以来高く評価されているところだが、こういう表現が成立するのは、この前後の描写がすべて正太郎の心理に即してなされているためであるということはおいてよいことだと思う。読者も当然正太郎の側に立って読んでいくことになり、その結果、礒良の言葉の意味は深く反芻されないまま、そのあとの陰陽師の言葉が印象づけられることになるのである。

すなわち、この作品における怪異はすべて男性原理の側から叙述されており、「目の前につきつけられたような戦慄感」（重友一九五七）云々の評語・評価等はすべてそれに従ったものであるのだが、女性原理の側に立てば、怪異自体の意味も当然異なって見えてくることを知らなければならぬ。

この礒良の言葉についてみても、陰陽師の「さきに女の命をうばひ。怨み猶尽ず。足下の命も旦夕にせまる」という言葉に示されているように、正太郎への復讐だけが目的なら、なぜ「見奉る」「まいらせん」等の敬語を使ったのだろうか。また、すぐその場で取り殺すことも可能であっただろうに、気絶させるだけで終わったのはなぜか等々、疑問はいくつもわいてくるのである。

そういうふたつの原理の対立を如実に示すのが、この箇所の現代語訳である。

「めづらしくもあひ見奉るものかな」という一文を高田・稲田一九九七は「不思議なご縁でお会いするものです。」と訳し、長島一九九八は、「珍しいところでお会いいたします

ことよ」と訳している。たまたま、おなじ文庫に収められたこの二書におけるこうした訳の違いは、どちらの原理に立って訳すかの違いを典型的に示す興味深い例といえる。

長島訳は正太郎の立場で訳したもので、礪良の言葉が彼には、庭瀬の実家ではない「めずらしい」場所でお会いするものですね、という皮肉として受け取られたであろうことを踏まえたものである。一方、高田・稲田訳は礪良の心情に重点をおいて訳したものであり、「めずらしい御縁で、やっとお会いすることができましたね」という、正太郎との出会いを喜ぶ気持ちが含まれているとみただのであろう。もちろん、喜ぶとはいっても、「浅茅が宿」の宮木の「今は長き恨みもはれぐ」となりぬる事の喜しく侍り。逢を待間に恋死なんは人しらぬ恨みなるべし」という言葉のようにストレート（とはいっても「長き恨み」「逢を待間に恋死なん」という語句は含まれているのだが）に表現されているわけではなく、自分のもとから逃亡しつづける夫正太郎とやっとお面できた（というより、つかまえことができた、とでもいうべきか）という気持ちの表明となっているのである。その意味では、この言葉は、一種類の現代語訳だけでは、そこに含まれている二重性は伝ええないというべきなのかもしれない。

それにつづく「つらき報ひの程」とは、ここに至るまでの礪良の苦しみをいうが、正太郎にはおそらく「報ひ」という言葉だけが、印象づけられたことだろう。しかし、単に復讐するだけなら、ここで殺してしまってもよかつたはずであるが、礪良の目的はそこにはない。「しらせまいらせん」というのだから、そのことを正太郎にも味わせたい、と彼女は考えているのである。彼女のことを全く理解しようとしないう正太郎に対して、「霊」と化することによってはじめて可能な方法によって自分の思いを伝えようとしたのである。もちろん、そのなかには、恨みの気持ちも復讐の念も含まれている。しかし、根底にあるのは、自分とまともに向きあうことをしない夫に対するコミュニケーション回復の思いである。遙か彼方からの長い長い呼びかけ—Long Distant Call が、いまこのとき、彼女の口から初めて発せられたのである。

とすれば、袖の死は、その第一歩として計画されたものといえるであろう。大切な存在を奪われることの痛みを身をもって体験させることがその目的であったと考えれば、袖の死を大袈裟に嘆く正太郎は、すでに礪良の術中にはまりこんでいると見ていいはずなのである。

5

陰陽師は、

災すでに窮りて易からず。さきに女の命をうばひ。怨み猶尽ず。足下の命も旦夕にせまる。此鬼世をさりぬるは七日前なれば。今日より四十二日が間戸を閉ておもき物齋すべし。我禁しめを守らば九死を出て全からんか。一時を過るともまぬがるべからずと警告し、正太郎の体に梵字を書き、朱符を与えて「此呪を戸毎に貼て神仏を念ずべし。あやまちして身を亡ぶることなかれ」といましめている。が、「神の祈させ給はぬ」結婚の当事者の一人である正太郎にとって「神仏を念ず」ることにどんな意味があったらうか。陰陽師の警告が失敗に終ることは火を見るよりも明らかであるといつてよい。

しかし、物語を先取りしてはいけない。我々はこの陰陽師の警告に従って、以下の場面を読んでいくしかないわけであるが、そこで、再び正太郎のもとを訪れてくる「鬼」を体

験することになる。この作品のクライマックスというべきシーンである。

しかし、この「鬼」についての描写をたどってみると、具体的な描写が意外に少ないことに驚かされる。「鬼」について描かれているのは、

下屋しもやの窓の紙にさと赤き光さして

かの鬼も夜ごとに家を繞りめぐ或は屋の棟に叫びて。忿いれる声夜ましにすぎまし  
という二ヶ所だけで、あとは、

おそろしさのあまりに長き夜をかこつ。程なく夜明ぬるに生出で。……松ふく風物を僵たを  
すがごとく。雨さへふりて常たならぬ夜のさまに。壁を隔て声をかけあひ。既に四更に  
いたる。……深き夜にはいと凄しく。髪も生毛うぶげもことごとく聳立そはたちて。しばらくは死  
入たり。明れば夜のさまをかたり。暮れば明るを慕ひて。此月日頃千歳を過るよりも  
久し。

という正太郎の様子が記されているだけなのである。つまり、この恐怖感は、さきの三  
味堂における礪良の、

顔の色いと青ざめて。たゆき眼すぎましく。我を指たる手の青くほそりたる

というような具体的描写によるものではない。すべては、正太郎の恐がり方に起因すると  
いつて過言ではないのである。

あるいは、この「鬼」が言葉を発しているではないか、という人がいるかもしれない。  
が、その言葉は、

あなにくや。こゝにたふとき符文を設つるよ。

であり、

あな悪にくや。こゝにも貼つるよ。

というものである。これは、朱符が貼られてしまっているため、正太郎とコミュニケーション  
する道が閉ざされてしまったことへの恨み言ではあっても、正太郎をおどそうとする（二つ  
らき報ひの程しらせまいらせん」というような）意志は微塵も含まれていない。その意味  
で、礪良は正太郎に対してはたった一つのことしか語っていないのである。

前にも述べたように、この作品において、怪異の場面はすべて正太郎の心理に即して叙述  
されているわけだが、その心理は、礪良への罪悪感と恐怖感とがないまぜになつたもので  
あるが、それは彼自身の内部においても明確に自覚されないまま、恐怖感だけが先行する  
ことになっているのである。

彼にとって、さしあたりすがれるのは、陰陽師の警告に従って、四十九日の「物齋」を  
無事に切り抜けることだけであるが、しかし、四十九日目が過ぎれば本当に彼は無罪放免  
されるのだろうか。かれに取り憑いている「鬼」はそんなに簡単に退散するのだろうか。  
もし、それが「吉備津の釜」の直前の作品である「仏法僧」のように場所に出現する怪異  
ならば、夢然父子のように、朝になり高野山を下りていけば、もはや秀次一行の亡霊とは  
無関係でいられよう。が、正太郎と礪良の関係はそんな単純なものではなかったはずであ  
る。怪異譚としてみれば、陰陽師の予言は絶対的なものだが、しかし、礪良がそれを受け  
入れているかは別の問題である。しかし、物語は、怪異譚としての約束に従って、四十九  
日目がまるで最後の審判の日であるかのように進行していく。

かくして四十二日といふ其夜にいたりぬ。今は一夜にみたしぬれば。殊に慎みて。や  
ゝ五更の天もしらくと明わたりぬ。長き夢のさめたる如く。やがて彦六このかみをよぶに。  
壁によりていかにと答ふ。おもき物いみも既に満ぬ。絶て兄長このかみのを見ず。なつかしさ



に。かつ此月頃の憂<sup>うれ</sup>怕<sup>おそ</sup>しさを心のかぎりいひ和さまん。眠さまし給へ。我も外の方に出んといふ。彦六用意なき男なれば。今は何かあらん。いざこなたへわたり給へと。戸を明る事半<sup>なかば</sup>ならず。となりの軒にあなやと叫ぶ声耳をつらぬきて。思はず尻居<sup>しりみ</sup>に座す。

ここでは、「やゝ五更の天もしらく」と明わたりぬ。」というのが正太郎だけの理解であった、ということがすべてである。青木正次一九八一は、この部分の会話の主体について様々の解釈可能性を検討してたいへん参考になるが、大切なことは、ここまですつと正太郎に即して叙述がなされてきており、彼の姿が物語から消えた瞬間、本来の叙述にもどり、正太郎が詐術にひつかかったのだということが明かされるしかけになっているという点である。

彦六が外に出たとき「夜はいまだくらく。月は中天<sup>なかぞら</sup>ながら影朧<sup>らう</sup>く」として。風冷やかに。」という状態であったと記されているが、その直前に「明たるといひし」と書かれていることからすると、彼は自分の目で夜明けを確認したのではなかったということがわかる。にもかかわらず、正太郎の言葉をそのまま受け入れて「今は何かあらん。いざこなたへわたり給へ」と誘いかけたことが「用意なき男」と書かれるゆえんなのである。

ここはいうまでもなく、この物語のクライマックスであるが、同時に、男性原理と女性原理がもつともはなはだしい亀裂をみせているところでもある。

表層の叙述に従えば、正太郎は「戸腋<sup>とわき</sup>の壁」の「腥<sup>なま</sup>くしき血」と「髪<sup>もひ</sup>の髻<sup>むすびり</sup>」だけを残して消え去ってしまったことになる。遺体の残っていないことを、彦六も遺族もさして不思議がることはせず、陰陽師のいましめを破つたため「悪鬼」礒良の復讐を受けたのであろう、と理解されて終わっている。そして、末尾に、

されば陰陽師が占<sup>うら</sup>のいちじるき。御釜<sup>あしき</sup>の凶<sup>あしき</sup>祥<sup>いさ</sup>もはたたがはざりけるぞ。いとまたふとかりけるとかたり伝へけり。

と記されることによって、表層レベルにおける「悪鬼」による復讐の物語としてのつじつまはきちんと合うようになっていく。ここでは、礒良の名前が醜貌の神の名に由来することなども巧妙に情報として加味されているわけである。

この末尾の部分については、「古今東西の怪談小説を通じて見ることを得ない」「恐怖と戦慄を覚えしめる」(重友一九五三)等にみられるように、従来から高い評価が与えられてきた。そのことに異論を唱えるわけではないが、そういう怪異譚としての性格はあくまでもこの物語の表層のレベルに関しており、深層にはさらに別の物語の存在することを見逃してはならないと思う。それは、すでに折に触れて語ってきたところであるが、ここで問題としていえば、遺体が残っていないことをどう考えるかである。「次元を異にする強烈な力のはたらきかけ」(重友一九五三)とか「土俗的伝承と人身消失譚のむすびつき」(高田・稲田一九九七)等の説明があるが、これは、怪異譚の範疇で考えるべき問題ではないと思われる。ここにこそ、この物語の深層Ⅱ女性原理の原点があるからである。

かつて、私は、新聞に連載した文章(父と子の対話形式をとっている)の中で、

子Ⅱで、正太郎の遺体はどうなったの？

父Ⅱ礒良の亡霊によってあの世へ連れ去られたんだろう。

子Ⅱ殺されたんじゃないの？

父Ⅱ彦六や正太郎の遺族にとつてはそうかもしれないけど、礒良にしてみれば、自分から逃げ続けていた亭主をやつとこういうかたちで自分のもとに呼び戻した、とい

うふうにも言えるんじゃないの。

と書いたことがあるが、この部分に注目し、仏教的な背景について考察したのが、鷲山樹心一九九二である。私の想定は、仏教的にも裏付けが可能であることを教えられて大変心強かったのであるが、ともあれ、ここにも書いたように、礪良にとつては、この末尾の段階においてはじめて正太郎をわがもとにひきよせることができたのである。自分のことを決してかえりみようとせず、ただ恐れ逃げるだけを男を、彼女はやつとわがもとに引き寄せたのである。そのあと二人がどうなったのかは物語の関知するところではない。それをもつて復讐というのなら、そう呼んでもいいが、この作品で、礪良が一貫して正太郎に呼びかけているのは、みずからの苦しみであり、みずからを理解することであり、そして自分にもあることなのである。その点で、彼女の願いは、「浅茅が宿」の宮木と全く同じであるといつてよい。ただ、彼女は、宮木のように、ただ、待つだけの女ではなかった。積極的にそのことを夫に対して伝えようとするのである。しかも、生霊・死霊となつて。嫉妬が「女の慳しき性」によるとして封じられていた時代の女性にとつてそれはほとんど唯一のコミュニケーションの手段だったのかもしれない。宮木は、「地霊」としてひとところにとどまり、夫を待ちつづけたが、礪良は、「生霊・死霊」として夫を追いかけつづけた、というふうな対比でもあるだろう。

そして、この物語の大きな特色として挙げなければならないのは、冒頭文からほぼ一貫して、叙述が、男性Ⅱ正太郎の側に寄り添ってすすめられているということである。その叙述のレベルに従えば、そこに展開されていくのは、断罪される男の物語ということになり、断罪する側の女性に関しては、すべて怪異として、恐怖に彩られたかたちで処理されていく。もちろん、そのレベルだけでも、この作品はきわめてすぐれた物語である。しかし、それがこの作品のすべてではない。その怪異の背後に、夫を遥か遠くから呼びつづける妻の声を聞くのでなかったら、この作品を真の意味で理解したとはいえないのである。

「菊花の約」では友情の物語というワケ組みで物語を作り、「浅茅が宿」では夫婦の情愛をたえたつつ物語を展開してきた作者は、この作品に至って、夫婦断罪論を語るふりをしながら、それとは似ても似つかない物語を語ってしまった。それは、一見すると、断罪される男の物語であるように見えるが、実は、断罪する女の側に立った物語なのであった。そして、ここに気づいたときはじめて、冒頭の夫婦断罪論は、真の意味で無化されるのである。だから、「菊花の約」のように末尾で冒頭文への回帰はなされない。御釜祓いや陰陽師の予言は反芻されても、である。残された冒頭文は、ただ、作品の叙述が寄り添う立場を示す意味しか持たなくなるのである。

これ以後、『雨月物語』では、この種のマクラを作品の冒頭に置くことはなくなる。それは、「仏法僧」にむ至るまで、日常的な道徳・倫理と折り合いをつけながら展開されてきた『雨月物語』の作品世界が変質していくことを意味している。そのことは、高野山という場所をテーマにした「仏法僧」においていくらかは予感されるものではあったが、「吉備津の釜」以後の『雨月物語』後半部では、読者（それは、なにも近世の読者に限るものではない）の抱えこんでいる日常的な道徳・倫理に挑戦するかたちで物語は形成されていくのである。そして、作品における女性原理と男性原理の問題は、次の「蛇性の姪」において、よりいっそうはつきりとした対立としてあらわれるのである。

注

1、吉備津の釜の神託は、作品の題名になっているという意味ではたしかに重要な素材であるが、だからといって、私は、この作品が、その神託にそむいたために起きた不幸な物語、というふうな単純な構造の作品であるとは考えていない。神仏の靈験譚でない限りそういう物語は成立しないはずであり、そうである以上、神託の意味を作品のどの範囲にまで及ぼして考えるかは「吉備津の釜」論にとつてきわめて重要な問題のはずである。この作品が、中世の説話でも古代の物語でもない、近世の小説作品であるということは忘れてならないことであり、ここをきちんと踏まえたうえで、この神託の及ぶ射程を慎重にはかかっていかねばならないと思う。

2、とはいっても、この若い女をどういうふうに説明したらいいのか、私にはうまい言葉が見つからない。礧良の化身とするのが一番簡単な説明だろうが、さし絵では彼女が礧良の死霊のそばに控えていることになっているので、これはあまり納得いく説明とはいえない。諸家の注や解説でも、この点は特に問題にはされていないようである。

3、木越 治 「〈平成古典講座〉雨月物語」北国新聞日曜版連載 一九九一年6～12月

### 引用文献一覧

重友 毅 『雨月物語評釋「増訂版」』 明治書院刊 一九五七年10月

重友 毅 雨月物語評論(四) 再び「吉備津の釜」について 『近世文学史の諸問題』(明治書院刊 一九六三年12月)、なお、『重友毅著作集〈第4巻〉秋成の研究』(文理書院刊 1971年5月)にも収録。

青木正次 『雨月物語』 講談社学術文庫刊 一九八一年6月

鷺山樹心 「吉備津の釜」結末について 花園大学国文学論究 20 一九九二年11月

高田衛・稲田篤信 『雨月物語』 ちくま学芸文庫刊 一九九七年10月(もと、『雨月物語評解』 有精堂出版刊 一九八〇年9月を文庫化したもの)

長島弘明 『雨月物語の世界』 ちくま学芸文庫刊 一九九八年4月(もと、『NHKセミナー・江戸文芸をよむ』 雨月物語・幻想の宇宙(上)(下)』 日本放送出版協会刊 一九九四年10月・一九九五年1月を文庫化したもの)

なお、『雨月物語』の本文は、上田秋成全集第七巻によつたが、振仮名は適宜省略したところがある。

## 付記

中村博保先生のご冥福を心からお祈りいたします。

卒業論文の準備をしているときに読んだ先生の御論文『目ひとつの神』研究」は、私にとつて、以後の研究上の目標でありました。また、『雨月物語評釈』の先生の執筆部分を折に触れて熟読していたのもこの頃です。

そうした気持を持ちながら、しかし、研究者として同じフィールドに立つようになってからは、直接・間接にしばしばきつい批評をしたため、「直言家」としてけむたくお思いになっていたようです。しかし、拙著の書評の中で、そうした生意気な「直言」に対しても真摯に答えようとして下さった先生の態度には、本当に頭の下がる思いです。

つたない本稿を、先生の御霊前に捧げさせていただく次第です。